

林光寺だより

真宗大谷派 林光寺広報委員会 発行
〒443-0104 愛知県蒲郡市形原町中屋敷 36
TEL(0533)57-3283 mail. linkou@sk.aitai.ne.jp



「春日浦海岸ダブルレインボー」 写真:近藤秀男 撮影地 形原町春日浦
(説明) 雨上がりの午後、春日浦海岸は綺麗な虹で私を迎えてくれた。

報恩講

報恩講は、宗祖親鸞聖人の祥月命日の法要です。親鸞聖人ご入滅後、門弟たちが毎年ご命日に集まってお参りをしていました。

親鸞聖人の曾孫にあたる覚如上人が、聖人の三十三回忌にあたり、『報恩講式』を著わして法要次第を調べて、法要を勤められたことから親鸞聖人のご命日の法要を「報恩講」と呼ぶようになりました。やがて、八代目蓮如上人の時代に地方の各末寺でも「報恩講」を勤めるようになったといえます。

さらに、それに先だつて親鸞聖人ご自身も、師法然上人のご命日に人々を集めて、念仏の教えを語りあわれたともいわれています。

お盆やお彼岸の法要は、住職が主催して勤めるものですが、報恩講は門徒が勤める法事です。「門徒」とは、親鸞聖人の伝えてくださった念仏浄土門に入る徒(ともがら)で、一人ひとりが宗祖親鸞聖人の門徒として、ご命日のお参りをし、教えを学ぶのが「報恩講」だからです。

林光寺では、有志の皆さんが仏具のおみがき、おけそくの餅つき、仏さまのお花たてを何日も前から準備をしてくださり、報恩講の会計や司会進行は総代さんが責任をもってくださいています。

報恩講を四日間お勤めされる寺は珍しくなってきましたが、一人でも多くお参りいただくように日程を減らさないように役員さんも頑張ってくださいています。

今年も報恩講をお勤めします。林光寺の門徒の皆さんには、期間中ぜひお参りいただき、少しでも親鸞聖人のお話をお聞きいただきますようご案内します。(住職)

真宗のつどい法話

六月十七日（火）

ジエシーしゃくほうかい釋萌海さん

（敦賀市 高雲寺住職）

【テーマ】 いのちはだれのものか

～浄土の真宗に選びとられて～

今日の私の講題は「いのちはだれのものか」というタイトルなんですけど、考えたことありますか？「いま、いのちがあなたを生きている」「東本願寺の表の塀にありました。」

この「いのちはだれのものか」その結論は、なんとなく「いま、いのちがあなたを生きている」ということになるという気がしているんです。

私が産まれ育ったのはスイスです。「ベストキッド」という空手の映画を見て空手を学びたいと思って、六歳の時空手の道場に通いはじめて、黒帯までとって道場長になったんです。日本に来るご縁となったのは空手だったんです。次は刀を買って、居合抜きをやって四段までとりました。その次が尺八。都山流と琴古流とありまして、師範の資格をとりました。

今度はこれ、真宗大谷派で初めての外国人住職になりました。まだまだ外国人は珍しいんですね。

スイスの宗教はキリスト教です。有名な儀式は洗礼です。これは親が受けさせるんです。まだ自分の意識がない時にね。それで小学生の時に2回目の儀式があるんです。それを終えて牧師が教会でお説教をした後、クッキーみたいなものをみんなに配るんです。洗礼を受けていない人はもちろんもらえない。

普通子どもはほとんど洗礼を受けるんです。うちの親は変わってたんやね。大人になったら自分で自分の道を選べば良いんじゃないかってね。洗礼受けていないのはスイスで珍しかった。今となっては有り難いと思うんですけど、子どもの時は寂しかった。高校を終えた後もう一回儀式があつて、その三回を終えると初めて教会で結婚式を挙げれるんです。基本的には信者であつて、はじめて教会で結婚式を挙げれるんです。

ただ、自分で選んだんじゃないから、その子が大きくなって「私宗教ないです」と答える人が増えたんです。どうして今宗教を必要としない人が増えてきたの

かな。浄土真宗、仏教でも同じことが言えるかも知れない。

母の話をしなければいけないんですけど。私の歩みに大きな影響を与えたから語らざるを得ないんです。

自己決定権で生きてきた世代。うちの母も、「生まれてくることを自分で決められなかったから、せめて死ぬくらい自分で決めていいんじゃないか」とよく言っていたんです。自分の最後を自分で決めたい。よく聞くのは、家族に迷惑かけたくない。NHKのドキュメンタリーで、四十代前半で神経の難病になって寝たきりになって、それでも生きて行けば良いんだと簡単に言えるのかという言葉を彼女が残していた。これもわかるね。

母は、私が小さい時から安楽死の団体の会員になっていて、よく言っていたのが車椅子に乗って



る人に会う度に「私こんなふうになるんだつたら早く死んだ方がいいんだ」って。一番仲良くしていた友だちが急に倒れて亡くなってから、「七十にもなったから私もう良いんだ。私も安楽死を選ぶわ」と言い出した。「あなたは安楽死団体の条件を満たしてないじゃないですか。治る見込みのない病気にかかっているか?」。そこで脳や心臓を調べてもらいに、いろんな病院を走り回るの。どこも悪いところが見つからない。それでも申請するわって。「まあどうぞどうぞ」って、条件を満たしてないから、たぶん安楽死は通らないんじゃないかなと。

二ヶ月くらいたったたら電話が掛かってきて、宝くじが当たったような喜びで「許可おりましたよ。あなたはもう死に立ち会おう?」って。死に立ち会うために帰って来るんかって。「泣くんだったら来んでいいよ」って。それは泣くよね。子どもにとって親はいつまでも居てほしいし、うちの母はどこも悪くないんです。最近のスイスの安楽死の団体は、高齢者であることは、治る見込みのない病気にかかっているというんです。治らないかもしれないですけど、生まれた以上付

てくるものですからね。一ヶ月たつたところでまた電話がかかってきて、今度は「来週の木曜日の十時に死にます」。二週間カウントダウンが始まる。毎日電話して喧嘩する。「何で今死ぬ必要があるのか」と。

そうしたら、「いのちは私のものだ。生きるのも死ぬのも私の権利であるから、あなたは私を引きとめる権利がない」。それを毎回言われて。「いのちはだれのものか」「いま、いのちがあなたを生きている」というところにつながったんです。母が残してくれたものですよね。でもこの時はつらかった。泣いて、私たち子どものために生きてほしいと願ったりもするんですけど、もうそれも届かない。最後の日にはさよならパーティー開いて、パーティー開くほど友だちいるなら何が寂しいのかって。でも「It's My Life」。何を言っても意見を変えてくれない。最後は、母が「いま雪が降ってる、死ぬのにちようどいい天気やわ。ほんじゃね」って電話切るんですね。残された者は複雑な気持ちが残っているんです。こういう死に方して、悲しめないんですね。自分を責めたりいろんな気持ちがあるんです。

本山の住職修習では総代さんたちの前でどういう寺にしたいか気持ちを伝えるんです。私は寺は出会いの場にしていきたい、人と出会うことも大事だし親鸞さんの教えに出会ってほしい。でも最終的には自分自身に出会うんですね。仏教は誰のためにあるか、お念仏は救われる教えであるか、そういう問いをもちながら自分自身が立ち上がらなければならぬんです。

それがあつたから出会えた。母のわがままで自己中心的な死の私有化がなければ、私いまお坊さんになっていない。自分自身も最初は母に怒っていたんです。怒りはなかなか消えないですけど、あなたはこのいただいたいのちを感謝し、大事にしながら生きているのかと、自分がテーマになった。自分がテーマ・問いにならないければ道が始まらない。母も老いていく不安を感じて、宗教も心の依り処もなく安楽死を選んだのかなとか、母はこう感じたのかなと出会い直して行くんです。悲しみは消えるものではなくて深めるものであるんです。そこが大事なかなと思っています。

(法話から抜粋)

夏の法話会 法話

七月五日(土)

まつばやし

いたる

松林 至 師

(安城市 西岸寺住職)

今日は、ここ二年以内にお葬儀をあげられた方を中心にお参りされているということ、で、私自身も昨年父を亡くしまして、その思いも踏まえてお話をさせていただきたいと思っています。

死ぬという言葉は不思議な動詞でして、生きている者にとっては死なれるという形ではないですね。私を含め、今日ここにお越しの方は「死なれた」という中でお話を聞きいただいていると思います。亡くなっていかけた方は、今の私にとってどういう方なのでしょうか。

以前、あるお宅のおおじいさんが亡くなって七日参りに伺った時に、そのお家の当時六歳だった男の子と一緒に参りしていました。おおじいさんが亡くなっていかけたことをどう感じているのか気になったので、「おおじいちゃん死んじゃったねえ。どうなっちゃっただね?」と聞いてみたところ、

その子は「おおじいちゃんね、今死んだ」と答えました。私たちは亡くなっていかけた方の御命日に、その方は死んだと言って何か終わらせていくものがあるように思うのですが、よくよく考えてみれば、その方は御命日まで生きたのです。そしてその日からずっと亡くなっておられるんですね。出会った私が生きている以上、いま亡くなっておられる方に出会っていくことが残されているということとその子の言葉から改めて考えさせられました。

では、いま亡くなっておられる方とどう出会い直していくのか。これはまた別の法事の時のことでありまして、仏間で走り回る子どもたちに親御さんたちが「おおおばあちゃんにお参りするよ」と言っただけで子どもたちを座らせてお勤めが始まったのですが、そのおおじいさんが孫や曾孫さんたちに、「おおおばあさんにお参りするじゃねえ。おおおばあさんとお参りするだ」と仰りました。決して亡くなった人にお参りしてはいけないというのではなく、遺徳を偲びながら亡くなっている方と共に手を合わせ、今日大事に受け止めなければならぬことは何なのかを

亡くなった方から問いとしていただくことが浄土真宗の仏事の願いとしてあるのです。

そうすると、何に手を合わせたらいいいのか、亡き人から何をいただくのかということになるのですが、それがわかるのには時間がかかるんです。葬儀が終わったからといって別れでは済まないですね。何度も仏事を重ね、しばらく立ち尽くす時間が必要です。そしてそれは、あの人だけどこかへ行ってしまったということではなく、先にお浄土に還っていかれたのであり、この私も必ず同じところに還っていくということを受け止める時間でもあることを、ご門徒さんとの関わりの中で思うことであり、思いました。そこに立った時、この私がどうやってこの娑婆を生き切らせていただくのかを教えてもらうのです。

(法話抜粋)



インタビュー おんどうぼう

御 同 朋

(12)

今回は、戦後・三河地震八十年にあたり、林光寺の総代の市川伊嗣さんと淑子さんご夫妻にお聞きしました。

市川 伊嗣さん 淑子さん

ただつぐ よしこ

(形原町前野)

Q 戦後、そして三河地震から八十年になりますが、当時の様子をお聞かせください。

伊嗣さん 地震のとき、私は小学校二年生で八歳かな。一月十三日早朝だったので、ゆれてたのは一分か二分のことだったかと思うけど、もう揺れがおさまって外へ出るのがやっとだった。出口がひずんで開かなかった。駐在所のお巡りさんがまわってきて、家から布団を出してくれたんです。余震が何回も来て家に入れないんでね。布団をかぶってた。

地震が来た後って何でか静かでね、「たすけて」という声が聞こえてきた。

周りの家が何軒も倒壊して、お母さんが子どもを抱いて亡くなったり、双子の子どもさんが亡くなったり。しばらく家

に入れないんで、裏に掘ってあった防空壕に入っていたね。今のようなボランティアや救援はなかったですね。戦争中報道もほとんどされなかった。

Q 淑子さんはその頃どうでしたか？

淑子さん 私の在所は岡崎で、地震は影響なかったですけど、戦争中で空襲を経験しました。夜寝ていたら空襲警報が発令されて、蚊帳から飛び出して、兄と私とおばあさんが弟をおぶって、父が掘ってくれた防空壕に急いで入りました。屋根でカリカリッという音がして焼夷弾が落ちてくるんです。そんな中、父が戦争に行っていましたから、家を守らないと母が必死に水をかけて消火して家は何とに残りました。隣の家は燃えてしましました。

防空壕の横に家から出して積んでおいた布団の上に焼夷弾が落ちて、急いで逃げたのは忘れられないです。

伊嗣さん 蒲郡に空襲はなかったけど、何回

も哨戒機が来て機銃掃射にあった人もあった。豊橋の空襲は海岸で見ました。西の方から飛行機が飛んできて、2、3分すると火の手が上がってね。

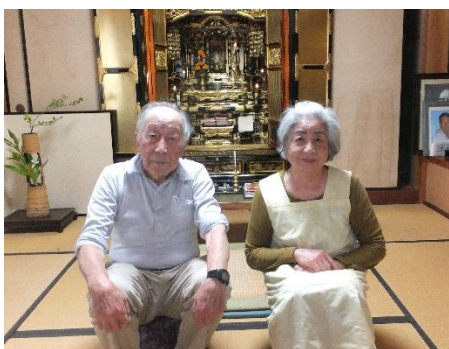
地震の前に東の方からドーン、ドーンと音がしてたけど、米軍の艦砲射撃だって誰かが言っていました。今思うと予震だったんだろうね。

Q そういう体験から今どう思われますか？

伊嗣さん 今の平和な時代を生きている若い人には理解できないと思いますね。

淑子さん 今は

良いけど、戦争を知らない人ばかりになると、どうなっていくのか心配ですね。



仏教あれこれ

12 聖徳太子 その3 (法隆寺)

今から 50 年以上前のこと、受験勉強に忙しい夏休みに梅原 猛 著『隠された十字架－法隆寺論』というかなりボリュームのある本を読みました。梅原さんは基本的に哲学者なので、なんとなく読みづらい本であったのですが、「十字架」だとか「法隆寺は聖徳太子一家の怨霊を鎮めるために建てられた、怨霊鎮魂の寺」だとか「法隆寺の七不思議」だとか気になる単語が並んでいましたので、時間がかかりましたが、夏休み中に読み終えました。

法隆寺は、607 年に聖徳太子によって創建されたとされますが、『日本書紀』に 670 年に全焼した、と記されています。明治以来「再建・非再建論争」がうるさかったのですが、「年輪年代測定」という科学的手法による分析結果から、現在では再建された、という説に落ち着いています。(蛇足ですが、再建という漢字は寺社の「建 立」という単語の対として読めば「さいこん」と読むのが適切かなと思います。寺社以外で立て直す場合は「さいけん」がふさわしいかも。NHK の番組では寺社の場合にも両方使っているようです。)

そしてこの消失前後から藤原 不比等らが中心になって作った『日本書紀』(720 年)完成のころまでに、「太子伝説」が作り上げられているようです。再建時のさまざまな技法が「法隆寺の七不思議」になっているわけで、藤原氏が聖徳太子を過剰に神聖化し、立派な人物に持ち上げれば持ち上げるほど、蘇我入鹿(聖徳太子の息子である山背大兄王一族を滅亡させ、太子一族を根絶やしにした)が極悪人になり、それにともない中臣(藤原)鎌足(藤原不比等の父)が善人になるという構図＝梅原氏の陰謀説もあながち的外れでもないように気がします。

聖徳太子の功績の一つに「仏教の保護」があります。仏教黎明期に蘇我氏とともに興隆を図っていったとされていますが、蘇我氏を滅ぼした中臣氏(もともと日本の神祇を司る氏族)が藤原氏と改称して日本の仏教界を背負っていくことになります。そのシンボルとして神聖化された聖徳太子を利用したのではないのでしょうか。



おんりょうちんこん

第一部 謎の提起 [編集]

- 法隆寺の七不思議
- 私の考える法隆寺七つの謎
- 再建論と非再建論の対決
- 若草伽藍址の発見と再建の時代

第二部 解決の手掛り [編集]

第一章 なぜ法隆寺は再建されたか

- 常識の盲点
- たたりの条件
- 中門の謎をめぐって
- 偶数の原理に秘められた意味
- 死の影におおわれた寺

第二章 誰が法隆寺を建てたか

- 法隆寺にさす橋三千代の影
- 『資材帳』の語る略略と恐怖
- 聖化された上宮太子の謎
- 『日本書紀』のもう一つの潤色
- 藤原一忠臣の出身
- 『書紀』の主張する入鹿暗殺正当化の論理
- 山背大兄一族全滅の三様の記述
- 孝徳帝一派の悲喜劇
- 蘇我氏滅亡と氏族制崩壊の演出者－藤原鎌足
- 藤原の支配と血の粛清
- 権力の原理の貫徹－定慧の悲劇
- 因果律の偽造
- 怖るべき怨霊のための鎮魂の寺

第三章 法隆寺再建の政治的背景

- 思想の運命と担い手の運命
- 中臣・神道と藤原・仏教の使いわけ
- 天武による仏教の国家管理政策

『隠された十字架－法隆寺論』目次

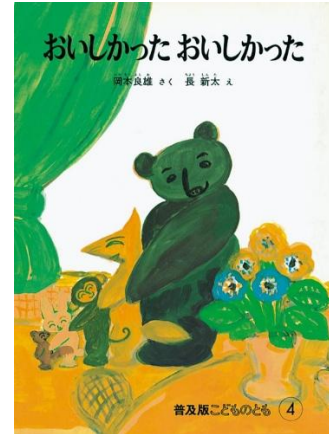
形原町 鈴木祥司

【本の紹介】

「おいしかった おいしかった」 岡本良雄 さく 長 新太 絵 福音館書店

やまの キツネが、びょうきで ねていました。
「おみまいに いってあげましょう」
クマは、おおきな かごに、
ぶどうの みを いっぱい いれて、
のっこのこと でかけていきました。

すると、とちゅうで、サルに あいました。
「ねえ、クマさん。おなかが ペこペこなんだよ。
その ぶどうを すこし くないかなあ」
クマは、サルに、
ぶどうを はんぶん あげました。そして、
「わたしはね、これから、びょうきの キツネさんをおみまいに いくのよ。さようなら」って、
また、のっこのこと あるいていきました。



サルは おおよろこびです。
そして、すぐ、
「いただきまます」って、たべようとしてましたが、・・・

さて、この後、どうなったでしょう。
あなたが、今まで食べたものの中で一番おいしかったものは何ですか？
わたしは、やっぱり、一番と言ったら、家族5人そろって食べたお母さんの作った茶碗蒸し。
そして、教員をしていたときに子どもたちと一緒に食べた給食の味も忘れられません。
おいしいときは、幸せのとき。

(形原町 鈴木 真理)

Column

以前、ある冊子を読んで出あったお言葉ですが、
その筆者の住職が法話をお願いした先生に「些少で
すみません」と言って法礼を渡したところ、「そんな
こと言わんでいい。私は精一杯のお礼として受け取
らせていただく」と言われたことがあったそうで
す。
そして、それは自分を立てるための言葉であるとい
うお叱りを受けたことを語っておられました。
本来礼儀とは、相手に対する敬意を示す、尊重か
ら出てくるもののはずが、自分の尊厳を保つための
ものであったというのです。
この言葉は私自身を見抜かれた仏法としてとて
も響くものがありました。そこに、日頃の人との関
わり合いの中で、礼儀を弁えていない無知な自分で
ありたくない、礼儀正しい自分であろうとして自分
を飾ることにばかり気を取られていることに気付
かされました。
どれほど世間に適った自分であろうと力を尽く
しても、自分への執着から離れられず、それが自分
自身を苦しませて迷っている…わかってはいても
抜け出せませんね。
(証)

二〇二五年 林光寺報恩講のご案内

十二月十一日(木)～十四日(日)

テーマ 往生人

十一日 午後一時半 法話 榑野明仁師 なぎの あきひと

(西尾市本澄寺住職)

琵琶の演奏と絵説きをとおして、親鸞聖人の教えをお聞ぎします。

十二日 午後一時 法話 大橋恵真師 おおはし えしん

(柏原市遠慶寺住職)

真宗の教えを日常の問題をふまえて分かりやすく大阪弁で話してくださいます。

十三日 午後一時 法話 竹中慈祥師 たけなか じしょう

(米原市真廣寺住職)

竹中師は、難波別院で教えを伝える仕事をされています。

午後三時 御伝鈔 柴田俊史師 ごでんしやう しばた としきみ

(田原市願照寺住職)

『御伝鈔』(親鸞聖人の伝記)の拝読をお聞ぎします。



十四日 午前八時 法話 織田慶雄師 おだきやうゆう

(西尾市宿縁寺前住職)

朝のお参りに続き、今年も熱のこもったお話をお聞ぎしたいと思います。

午後一時 法話 尾畑文正師 おばたぶんしょう

(同朋大学名誉教授)

中日新聞の宗教のページで今週の言葉のコラムを担当されている先生です。現代社会の諸問題から、真宗の教えの意味をお話くださいます。

《お庫裡から》

九月の日曜日、朝お参りに来られた方から「お墓で猫の子が死んでますよ」と言われ、見に行くとまだ少し息をしていました。急いで連れてきて、猫用のミルクを買ってきて、介抱を試みましたが、間もなく息を引き取ってしまいました。

この猫は、お盆前に生まれて、母猫に育児放棄されたのか、数日前からよく玄関先で鳴いていた野良猫でした。その日の午後に住職と火葬場に連れて行ってお願いしてきました。

どうも、近所に野良猫にエサをやっている人があるようで、いつも十匹ほど野良猫がいて、本堂の屋根裏に入ったり、墓地のいたる処でフンをするので困り果てています。

「ご本人は良いことをしているつもりでも、他の人には迷惑をかけているということもわかっていただけたらなあと思います。」

(坊守)

